

京大探検者の会編 『京大探検部』

別項で「南極越冬記」に触れたが、その著者西堀栄三郎を初め、棲み分け理論から出発して独特の自然学を確立した今西錦司、フランス文学の桑原武夫、「モゴール族探検記」の梅棹忠夫、照葉樹林文化論の中尾佐助、「食事の文明論」の石毛直道、K-J法を創った川喜多二郎、サル学の伊谷純一郎など、京都大学は錚錚たる学者登山家・探検家を輩出した。上に掲げた人々は京大探検部創設やその活動に貢献した大御所で、その門下から大勢のフィールドワーカーが育っていった。

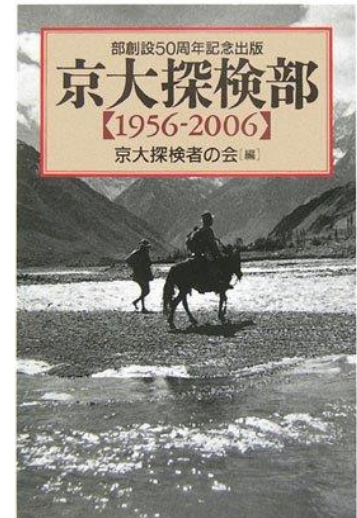
「南極越冬記」を読んだのは高校2年生の頃で、このような探検学者がいる京大に憧れたが、田舎の水飲み百姓の小倅には左様なアタマもゼニも無かった。

この本は、探検部創設50周年を記念して探検部関係者40人が往時の感懷を記した寄稿で構成されている。それぞれのフィールドでの海外調査研究の模様や、登山・探検とフィールドワークの関わりなどの寄稿が多いが、冒頭に掲載されている梅棹忠夫へのインタビュー記事や本多勝一執筆の探検部創設の経緯などは、京大山岳部（KUAC）、京都大学学士山岳会（AACK=Academic Alpine Club of Kyoto）との確執などが浮き彫りにされていて興味深い。それによれば、京大にはもともと海外登山・探検の受け皿として人文科学研究所、京大探検地理学会、生物誌研究会などがあったそうで、それらは今西錦司の「初登山以外に登山の真価はあり得ず。これはパイオニア・ワークにも通ず」という精神に則って活動していたが、それらの予備軍であった京大山岳部やAACK内部で登山（クライミング）志向派と探検志向派が対立するようになり、やがて山岳部から探検部が独立していった経緯が詳細に述べられている。また、寄稿者それぞれの探検部に対する微妙な温度差も率直に語られていて興味深い。

今では、地球上にはもはや「探検」すべき人跡未踏の場所が垂直的にも水平的にも残っておらず、「探検」なる言葉も死語になりつつあり、その意味で、この本は貴重な存在ではなかろうか。

余談であるが、過日、大阪の国立民族学博物館主催・京大学士山岳会後援で「登山・探検・フィールドワーカー地球の高みに向けてー」というセミナーを聴講する機会があった。2006年度の秩父宮記念山岳賞（日本山岳会）を受賞した同博物館山本紀夫教授の受賞と定年退官を記念した催しで、石毛直道など数人の京大出身のフィールドワーカーが登山・探検とフィールドワークについて講演したが、何れの講演者も現在では登山や探検からフィールドワークに出る人材が殆ど無いことを嘆いておられた。ある文化人類学者は『・・・、もはや「探検」すべき場所は人間の心の中と社会の中でしか見つけられない』と話していた。

重ねて余談で恐縮であるが、このセミナーには冒頭の老・梅棹忠夫先生も家族に付き添われて杖に縋って出席されており、入れ替わり立ち代り往時の教え子達が挨拶に来られていたが、目が不自由な先生はいちいち両手であっての弟子達の手を握られて、その後の様子などをお聞きになっていたのが印象的であった。 2006年3月新樹社刊。



(2007年3月 記)

[「山書の小溪」目次に戻る](#)